

国立大学法人秋田大学 第4期中期目標・中期計画（素案）

中 期 目 標	中 期 計 画
<p>（前文）法人の基本的な目標</p> <p>秋田大学は、知の創生を通じて地域と共に発展し、地域と共に歩むという存立の理念を掲げ、豊かな地域資源を有する北東北の基幹的な大学として、その使命である教育と研究を推進する。</p> <p>この見地から本学は、独創的な成果を世界に発信しつつ、国内外の意欲的な若者を受け入れ、優れた人材を育成するため、地域や世界の諸機関との連携による柔軟な教育研究体制の構築を推進する。</p> <p>一方、国立大学は、第4期中期目標期間において、地域から地球規模の諸課題に対処するためグローバル化やDX（Digital Transformation, デジタル技術による変革）と、それらを基礎とした産業・社会構造の変革等へ貢献していく必要がある。そこで、本学を構成する全ての学部・研究科等は、固有のミッションに基づく専門領域にICT（Information and Communication Technology, 情報通信技術）の要素を取り入れ、諸学諸組織との融合を通じて、地域社会の持続的な発展を担う専門的職業人と国際社会で活躍する高度専門職業人及び学術研究者を育成する。</p> <p>こうした基本認識に立って、本学は学生と教職員との全学的な知の交わりが躍動する、学修者中心の大学たることを目指す。</p> <p>以上のような理念に基づき、活動の基本的な目標を以下に定める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教育においては、質の国際通用性を高め、DX化推進に必要な素養を身に付け、地域と世界の諸課題の解決に取り組む人材を育成する。 2. 研究においては、ICTを進化させて地域から地球規模に至る社会課題の解決に挑み、DX化を推進するイノベーションを創出し、その成果を継続的に地域と世界に発信する。 3. 社会連携においては、教育研究成果を地域社会に還元し、地域と協働した地域振興策の取り組みを推進するとともに、ICTを活用した医療体系の充実を図り、地域医療の格差をなくすことに貢献す 	

る。

4. 国際化においては、資源産出国を中心とした諸外国の留学生・研究者との学術交流を推進するとともに、情報工学を活用したスマート・マイニング（情報工学を積極的に取り入れた“これから”の資源情報学）を実践するため、学生や教職員の海外留学・派遣を促進する。

5. 大学経営においては、学長主導の下、学生及び教職員一人ひとりの活力を相乗的に高めた組織文化を浸透させ、透明性を確保した健全で効率的な大学経営を目指すとともに、学生及び教職員が Society 5.0を構築するメンバーとして活躍できるよう環境を整備する。

◆ 中期目標の期間

中期目標の期間は、令和4年4月1日～令和10年3月31日までの6年間とする。

I 教育研究の質の向上に関する事項

1 社会との共創

【1】人材養成機能や研究成果を活用して、地域の産業（農林水産業、製造業、サービス産業等）の生産性向上や雇用の創出、文化の発展を牽引し、地域の課題解決のために、地方自治体や地域の産業界をリードする。①

I 教育研究の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 社会との共創に関する目標を達成するための措置

【1】地方公共団体や地元企業等との産学官連携として、地域社会や産業を牽引するため、府省・地方公共団体等の競争的資金を活用したプロジェクト事業、各種セミナーや研修会等を実施し、地域の課題解決のための共同研究等を推進する。

評価指標	<p>1) 電動化システム共同研究センターの「新世代モーター特性評価ラボ」における実験施設のセンター外（本学・秋田県立大学以外）の利用を2022年度は3機関、2023年度以降は毎年度5機関とする。</p> <p>2) 地元企業等との各種セミナー等を教育文化学部と理工学部で合わせて年7回以上開催する。</p> <p>3) 国際資源学部では、寄附講座設置者との共同研究を継続して実施する。</p> <p>4) 2023年度までに延べ100件以上の研究シーズ等の情報発信を行い、2025年度までに地域課題解決に関する共同研究のマッチングを行い、第4期終了時点での共同研究費を2020年度と比較し10%以上（1,000万円以上）増加させる。</p>
------	---

【2】地域の特性を踏まえた再生可能エネルギーを活用したグリーン社会（脱炭素と経済成長の両立）の構築や、高い健康リスクの問題を克服しQOL（Quality of Life, 生活の質）の向上を図り健康長寿社会へ寄与するため、地域社会における知のアカデミアとして培ってきた研究成果を活用し、地域の課題解決に貢献する。具体的に、グリーン社会の構築に向けては、教育プログラムを開設して人材育成を行うとともに、関連企業との共同研究を推進する。また、健康長寿社会へ寄与するためには、全ての年齢層を対象とし講演と意見交換を行うメディカルサイエンス・カフェや、中高年層を対象とした公開講座を実施し、健康寿命延伸や先進医療に関する研究開発、さらに認知症予防運動プログラムであるコグニサイズ秋田版を作成し推進する。一方、自殺予防に関する県民への情報発信（講演会、研修会、児童・生徒向け教室、研究・調査結果プレスリリース等）を実施する。

評価指標	<ol style="list-style-type: none"> 1) グリーン社会への貢献として、関連企業や公的機関等との連携数を第4期中に10件以上、関連する教育プログラムへの参加学生数を第4期中に50名以上とする。 2) メディカルサイエンス・カフェを年3回以上開催する。 3) 中高年層を対象とした健康に関する公開講座を年4回以上開催する。 4) 運動療法の介入による健康寿命延伸に関する研究を2023年度までに2件以上立ち上げ、第4期終了時までに成果を発表する。 5) 秋田版認知症予防コグニサイズをパイロットスタディ（予備調査）で効果を確認しながら、2023年度までに作成し、その後、秋田県内25市町村のうち、第4期終了時までに10市町村において普及活動を行う。 6) 研究開発では医理工連携「夢を語る会」において、2023年度以降年1件以上の研究プロジェクトを支援し、特許や実用新案の出願、商品化等を2024年度までに2件以上、第4期終了時までに5件以上にする。 7) 自殺予防に関する情報発信は、第4期中に累計で30回以上行う。
------	---

【3】超高齢社会における人口減少や地域の過疎化、雇用・生産・消費に係る地域経済の停滞等の課題解決に寄与するため、地方公共団体や地元企業等と連携し、社会のニーズに対応した実践的な教育内容の充実を図るとともに、地域社会の基盤を支え実社会で即戦力として活躍できる人材を養成するため、教育文化学部では教員・学生の研究成果の還元を図る取り組みを共同で実施する。

評価指標	1) 教育文化学部では、地域課題等の解決に資する、秋田県内の自治体・教育委員会、民間企業、NPO法人等との共
------	--

	<p>同の取り組みを実施し、地域の文化活動やまちづくり活動に参画する学生の比率を第4期終了時まで全学部生に対して10%以上となるようにする。</p>
--	--

2 教育

【2】国や社会、それを取り巻く国際社会の変化に応じて、求められる人材を育成するため、柔軟かつ機動的に教育プログラムや教育研究組織の改編・整備を推進することにより、需要と供給のマッチングを図る。④

【3】学生の能力が社会でどのように評価されているのか、調査、分析、検証をした上で、教育課程、入学者選抜の改善に繋げる。特に入学者選抜に関しては、学生に求める意欲・能力を明確にした上で、高等学校等で育成した能力を多面的・総合的に評価する。⑤

【4】特定の専攻分野を通じて課題を設定して探究するという基本的な思考の枠組みを身に付けさせるとともに、視野を広げるために他分野の知見にも触れることで、幅広い教養も身に付けた人材を養成する。(学士課程)⑥

2 教育に関する目標を達成するための措置

【4】ICTを活用し、専門分野の枠を超えた統合的かつ体系的な教育課程として、文理融合型のICT・データサイエンス系新学部を設置して学部や大学院の再編を行うとともに、保健医療政策を学ぶことができるプログラムを新設し運用を開始する。

評価指標	<p>1) 2024年度までに新学部を設置し関連する学部の改編を行うとともに、その4年後に大学院の改編・整備を行う。また、保健医療政策については、2025年度までに履修証明プログラムとして創設し、2026年度以降運用を始める。</p>
------	---

【5】各学部・研究科における各入学者選抜試験の成績や入学後の履修状況、成績推移の追跡、さらに学生が在学時に身に付けた能力の社会的評価を調査し、入学者選抜や教育課程の改善に繋げる質保証システムを構築する。

評価指標	<p>入学者選抜及び教育課程の点検・改善を行うための質保証システムを構築するため、以下の内容を実施する。</p> <p>1) 入学者選抜試験の結果や学業成績の状況等を毎年分析する。</p> <p>2) 上半期及び下半期に各1回、卒業生及び就職先へのアンケート調査を実施する。</p>
------	---

【6】各分野の実験実習における一部の技能を、バーチャルに体験できるXR(Extended Reality, 仮想空間技術の総称)やAI(Artificial Intelligence, 人工知能)等のICT教材を開発し、オンライン授業においても教育の質を確保するとともに、本教材を他分野の学生も活用できるようにすることにより、体験型授業を通じて学生の教養や知識を広げる教育の高度化を図る。

評価指標	<p>1) 2022年度までにBYOD(Bring Your Own Device, 個人所有PC等の活用)で授業利用可能なAI・データサイエンス等の教育用ソフトウェアを包括ライセンスするとともに、XRコンテンツの開発環境を整備する。2023年度以降は、1年に2回以上、ソフトウェアの利用講習会を開催し、学部学生が最新のAI・データサイエンスに触れ</p>
------	--

	<p>学べる環境を整える。これらの環境を利用し、上半期では、特定の学部のICT教材を作成し、実際に授業に導入して問題点の確認・改善等を行う。下半期では、上半期の取り組みを踏まえ、各学部で1種類以上の教材を開発して授業に取り入れ、他分野でも活用できるようにする。</p>
--	--

- 【7】 オンデマンド教材を含むデジタル教材のより一層の充実化を図り、授業中のみならず時間外においても主体的・自律的に学習する環境を整備し、また専攻分野における課題に対して、論理的に探究することができる能力を養うため、アクティブ・ラーニング（能動的学修）を推進する。

<p>評価指標</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1) 国際資源学部では、第4期終了時まで 25%以上の科目でオンデマンド教材を整備する。 2) 教育文化学部では、第4期終了時まで 25%以上の科目でオンデマンド教材を整備する。 3) 医学部医学科では2023年度までに画像データを用いた実習（組織学、病理学、微生物学等）を全実習の25%以上となるよう整備し、2024年度以降は点検・改善を行う。 4) 医学部保健学科では2025年度までに25%以上のオンデマンド教材を整備し、2026年度以降は点検・改善を行う。 5) 理工学部では、第4期終了時まで 分野横断型教育プログラムを2件以上設定し、本プログラム内に25%以上のオンデマンド教材を整備する。
-------------	---

- 【8】 データ駆動型社会の構築やこれを支える幅広い知識を身に付けた人材を育成するため、数理・データサイエンス・AI関連科目の新設や必修化を進め充実化を図る。また、情報リテラシー、自己管理能力、倫理観等も含む、学生が卒業時まで身に付けるべき知識、技能、態度、総合的な学習経験と創造的思考力を秋田大学学士力評価システムで検証する。

<p>評価指標</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1) 国際資源学部では、2022年度に教育学生委員会等において学生の理解度調査を行うとともに、新たなデータサイエンス関連科目の開設についても当該委員会において検討する。 2) 教育文化学部では第4期終了時までに関連科目の必修化を進める。 3) 医学部医学科では2023年度に改訂予定の医学教育モデル・コア・カリキュラムを参考に、第4期終了時まで2021年度現在必修として行っている科目の見直しと改善を進
-------------	---

	<p>める。</p> <p>4) 医学部保健学科では 2023 年度までに専門科目等の中で当該教育を行う。</p> <p>5) 理工学部では、情報、数理・データサイエンスに関するカリキュラム検討WG (Working Group, 専門部会) を 2024 年度までに設置し、4 科目新設する。</p> <p>6) 地域課題解決のスキルを身に付けさせる A I ・ I o T (Internet of Things, モノのインターネット) 関連の 4 単位分の科目について、2022 年～2023 年に科目内容等の検討を行い、2024 年度より新設する。</p> <p>7) 秋田大学学士力は、以下の内容を実施しながら、検証を行う。</p> <p>(1) 2022 年度から入学する学生が身に付けた知識、技能、態度等の 15 項目の能力についてカリキュラムマップをもとに定量化し、各学生、コース等の単位で可視化するとともに能力の修得とバランスの評価を行う。</p> <p>(2) 2023 年度以降も継続して評価を行い、入学時から卒業時までの能力修得の変化を追跡する。</p> <p>(3) 2026 年度以降は、追跡した結果をもとに、学科・コース等の教育課程の点検・改善を行う。</p>
--	--

【5】研究者養成の第一段階として必要な研究能力を備えた人材を養成する。高度の専門的な職業を担う人材を育成する課程においては、産業界等の社会で必要とされる実践的な能力を備えた人材を養成する。(修士課程) ⑦

【9】キャンパス内外で最先端の A I や I T (Information Technology, 情報技術) を利用できるようソフトウェア環境を整備して研究開発環境の機能を向上させるとともに、定期的にセミナーや講習会等を開催して、教職員や学生の I T 応用スキルの底上げを図り、実践的な研究開発能力を身に付けた人材を育成する。また、国際資源学研究科ではスマート・マイニング人材の育成を行い、教育学研究科では I T スキル育成の教育プログラムを開発する。

<p>評価指標</p>	<p>1) 2023 年度以降、利用講習会を年 2 回以上開催し、教職員や学生の利用状況を測定する。</p> <p>2) 国際資源学研究科では、上半期は大学の世界展開力強化事業の中でスマート・マイニング人材を毎年度 5 名育成し、下半期(事業終了後)は独自プログラムとして実施する。</p> <p>3) 教育学研究科では、年 2 回以上の F D (Faculty Development, 授業方法やカリキュラム内容の改善・向上のための組織的取組) ・ S D (Staff Development, 職員に必要な知識を身に付けさせるための研修) 活動等を通じてスキルアップを行い、第 4 期中に I T スキル育成の教育プログラムを 2 件以上開発する。</p>
-------------	---

- 【10】XRやAI等のICT教材の活用を推進し、他分野の研究内容について疑似的に体験できる環境及び体制を整備し、若手研究者の視野を広げて新たな着想が得られる環境を醸成するとともに、最先端の研究を支える技術職員の資質・能力の向上にも活用する。また、教育学研究科では他分野の研究内容を疑似的に体験できる教材を整備し、研究授業において評価を行う。理工学研究科では主専門・副専門教育プログラムの「分野融合・分野横断」をさらに発展させるため、新たな学修プログラムを設置する。

評価指標	<p>1) 2022年度までに若手研究者及び技術職員がXRコンテンツを体験可能な環境を整備する。2023年度以降は、1年に2回以上、ソフトウェアの利用講習会を開催し、若手研究者及び技術職員が継続して最新のICTを学んだり、(中期計画【6】で開発する)他分野のXRコンテンツを体験したりする機会を設定する。</p> <p>2) 教育学研究科では、上半期中に2件以上、下半期中に2件以上の教材を整備し、試行して定性的評価を行うとともに実施・普及を図る。</p> <p>3) 理工学研究科では、上半期に新たな学修プログラムを設計し、下半期に開設して、第4期終了時まで履修人数50名以上の学生を確保する。</p>
------	--

- 【11】高齢者の認知機能の検査・診断や日常生活をサポートする運動・治療について、研究科等連係課程実施基本組織として設置した先進ヘルスケア工学院を充実させるため、専門知識の涵養に加え、実習を通じた実践的な教育を推進し、また研究で取得したデータを解析するスキル向上のための環境整備により、超高齢社会に対応するシステム開発に携わることができる人材を育成する。

評価指標	<p>1) 2022年度までに数値解析・プログラミング等の教育研究環境を構築し、2023年度よりXR技術を活用した模擬実習体験環境を導入して教育内容の高度化を図る。</p> <p>2) 2022年度に、学生及び実習先等のアンケート等を基に、本工学院運営委員会において教育課程を点検・評価する体制を整備し、母体である医学系研究科及び理工学研究科と共有しながら改善する質保証システムを構築する。2023年度以降は、毎年、アンケート等を取得し、自己点検と改善により必要に応じた措置を実施するPDCAサイクル(Plan-Do-Check-Act cycle, 業務管理における継続的な改善方法)として運用する。</p>
------	---

【6】 医師や学校教員など、特定の職業に就く人材養成を目的とした課程において、当該職業分野で必要とされる資質・能力を意識し、教育課程を高度化することで、当該職業分野を先導し、中核となって活躍できる人材を養成する。⑩

【12】 教職高度化センターをハブ組織として機能させ、秋田県内の教職課程を有する大学・短大及び秋田県・各市町村教育委員会と密接に連携し、教員養成・研修を充実させ教職の高度化を図る。また、初等中等教育の国際化のための語学力やITスキルを身に付けた教員の養成と、カウンセリング等の高度な心理実践力を有する専門職人材を育成する。

評価指標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 2022年度に教育委員会と連携した現職教員、学生が参加できる研修講座計画を策定し、第4期終了時までに2021年度現在の2講座から4講座へ拡大する。 2) 2022年度に教職課程のICT教育の基本計画を策定するとともに、第4期終了時までに教育課程の改善を行う。 3) 教職大学院の修了生(学部卒院生)の教員就職率を第4期中の平均で90%以上を達成する。 4) 大学院心理教育実践専攻における心理関係資格取得のための教育課程を充実させ、大学院修了後2年以内の資格取得率100%を維持する。
------	--

【13】 超高齢社会における地域医療に貢献するため、シミュレータを活用して手技の習得を行い、地方自治体や医療機関、患者等の協力を得て実施する診療参加型臨床実習等により技能を身に付け、日本医学教育評価機構(JACME)が実施する分野別評価を通じて医学教育の質保証を行い、実践力と高度な知識を有する医師を養成する。

評価指標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 現行のクリニカル・クラークシップ(診療参加型臨床実習)WGをベースに、2023年度までに「医学教育・医師養成教育の質向上タスクチーム」を立ち上げ、新たな臨床教育ツールや手法の導入及び普及を図り、診療参加型臨床実習等の点検・改善を行う。 2) 卒業までに学生が備えておくべき能力として定めたコンピテンスレベルの達成状況を、毎年卒業時アンケートにより自己評価を行う。
------	---

【14】 疾病構造や地域社会が変容する中、多様かつ複雑な患者の医療・生活ニーズに寄り添い、患者のケアに加え補助的な医行為を行うなどして医師の補完的な役割を担うため、日本看護学教育評価機構(JABNE)が実施する分野別評価を通じて看護学教育の質保証を行った人材を養成するとともに、大学院においては診療看護師の育成を推進する。

評価指標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 2023年度までに高度実践看護師養成タスクチームを立ち上げ、JABNEの評価基準に従った自己点検・評価等
------	---

【7】データ駆動型社会への移行など産業界や地域社会等の変化に応じて、社会人向けの新たな教育プログラムを機動的に構築し、数理・データサイエンス・AIなど新たなリテラシーを身に付けた人材や、既存知識をリバイズした付加価値のある人材を養成することで、社会人のキャリアアップを支援する。⑪

【8】学生の海外派遣の拡大や、優秀な留学生の獲得と卒業・修了後のネットワーク化、海外の大学と連携した国際的な教育プログラムの提供等により、異なる価値観に触れ、国際感覚を持った人材を養成する。⑫

	を継続的に行い、その結果を踏まえた改善等を検討・実施するシステムを構築し、看護師養成機能の高度化を推進する。 2) 大学院博士前期課程における診療看護師を第4期期間中において年平均2名以上育成する。
--	--

【15】公開講座等を通じて各専門分野における社会人向けのリカレント教育を実施し、データ駆動型社会を見据えた数理・データサイエンス・AIに関するリテラシー教育の教材を、オンデマンドを活用するコンテンツとして整備し、社会人が受講しやすい環境を構築するとともに、地域社会におけるDXを産学官連携で推進する。

評価指標	1) 2022～2023年度は、社会人が学びたいとする分野・レベルについて調査を行い、2024年度以降、オンデマンドで学ぶ社会人学びなおしプログラムを提供する。下半期では、提供したコンテンツの活用状況や学習効果の検証をアンケートの実施等を踏まえて行い、提供科目やその内容の点検・改善を行う。 2) 保健領域（介護・健康寿命延伸等）の一般市民，介護者向けのe-Learningコンテンツを第4期期間中に2コース以上開設する。
------	--

【16】文部科学省認定社会通信教育である「秋田大学理工学部通信教育講座」において、郵送を用いる従来からの教学スタイルに加え、Webを用いる方法を整備することにより、社会人の職業上必要となる知識や技術の習得、教養知識のレベルアップに貢献する。

評価指標	1) Webを活用できるコースを上半期中に35%以上、第4期終了時までには70%以上とする。
------	--

【17】海外大学との連携を促進するため、大学間協定を締結して研究者間交流，学生交流等の取り組みを行うとともに、本学の国際競争力や国際的なプレゼンスを高めるため、国際共同研究を推進する。

評価指標	国際競争力を高めるため、第4期終了時までの達成目標として、以下の評価指標を設定する。 1) 単位互換を新規に7校（2021年度現在6校）と実施する。
------	---

	<p>2) ダブル・ディグリー・プログラムの構築を新規に2校（2021年度現在1校）と実施し、活発な相互派遣を維持する。</p> <p>3) 大学間協定を、2021年3月時点（67大学）を基準として30%増加させる。</p> <p>4) 海外拠点の設置及び活用を新規に4拠点（2021年度現在7拠点）整備する。</p>
--	---

- 【18】英語による情報発信や留学生が安心して生活できる支援体制の構築やICT環境を充実化し、またシラバスの英語化の促進、英語で実施される教育プログラムを構築し、優れた留学生を獲得する。

評価指標	<p>優れた留学生獲得を推進するため、以下の評価指標を設定する。</p> <p>1) 年間250名（2020年度末200名）の留学生の受入れを目指し、この人数を毎年維持する。なお、国際資源学部では入学時から卒業時まで全て英語の授業を受けられるようにし、2022年度から段階的に留学生を増加させながら、第4期終了時に1学年の定員の10%とする。また理工学部では学部入学定員に対する私費外国人留学生定員を、2021年度の5.31%から、上半期中に8%以上とし、第4期終了時まで10%以上まで増加させる。</p> <p>2) 受入れ状況の点検や課題を踏まえて、第4期終了時までの達成目標として、各学部等の実情に応じて、国際交流に関するホームページ、履修案内、各種パンフレット、学内の掲示物などの英語化により、留学生を受け入れるための学内の環境整備を行う。</p>
------	--

- 【19】学生の語学力を向上させながら、留学説明会や留学交流イベント、支援制度等の充実化を図り、また海外研修やインターンシップへ参加させる等、日本人学生の海外留学を促進する。

評価指標	<p>日本人学生の海外留学を促進するため、第4期終了時までの達成目標として、以下の評価指標を設定する。</p> <p>1) TOEIC等の外部資格・検定試験を活用した進級要件を設定する等、語学力の強化を図る。達成状況に応じて、適宜、要件の見直しを行う。</p> <p>2) 大学全体で20%の学生の海外留学を促進する。毎年こ</p>
------	--

	<p>の水準を維持できるようにプログラムの検討を行う。なお、新型コロナウイルス感染症等の世界的な感染状況により渡航することが不可の場合であっても、オンライン、あるいは国内において実施する。</p> <p>3) 国際資源学部で実施する海外資源フィールドワークの参加率を100%とし、その後も維持する。なお、新型コロナウイルス感染症等の世界的な感染状況により渡航することが不可の場合であっても、オンライン、あるいは国内において実施する。</p> <p>4) 国際資源学研究科において、教員総数に対する外国人教員比率を第4期終了時点で20%とする。</p>
--	---

- 【20】文化や国籍が異なる留学生や日本人学生が、一緒に意見交換する機会やボランティア活動へ参加する機会を拡充し、世界で活躍できる人材として多様性を深化させる。

評価指標	<p>世界で活躍できる人材を育成するため、第4期終了時までの達成目標として、以下の評価指標を設定する。</p> <p>1) 日本人学生と留学生との交流イベント等をさらに充実させ、年間のイベント参加者の総数延べ100名を達成する。</p> <p>2) オンラインを活用した異文化交流を目的としたバーチャル留学を6プログラム実施する。</p>
------	---

3 研究

- 【9】真理の探究、基本原理の解明や新たな発見を目指した基礎研究と個々の研究者の内発的動機に基づいて行われる学術研究の卓越性と多様性を強化する。併せて、時代の変化に依らず、継承・発展すべき学問分野に対して必要な資源を確保する。⑭

3 研究に関する目標を達成するための措置

- 【21】自然と科学の共生を目指し、データ駆動型サイエンス（AI、ICT、機械学習、ビッグデータ解析等）を活用した教育研究を推進するため、理工学研究科内にデータ駆動型サイエンスに関連した勉強会を立ち上げ、定期的を開催する。

評価指標	<p>1) 勉強会を年2回以上開催し、第4期期間中に1回以上参加したことがある教員比率を、第4期終了時までに90%以上とする。</p>
------	---

- 【22】本学が推進する学術研究の卓越性と多様性を強化するため、若手研究者を含む研究者等が科研費を獲得しながら専門分野をリードし、国際的にも活躍できるように研究費等の支援を行うとともに、最先端の実験設備を導入する等の研究環境の整備を行う。

【10】地域から地球規模に至る社会課題を解決し、より良い社会の実現に寄与するため、研究により得られた科学的理論や基礎的知見の現実社会での実践に向けた研究開発を進め、社会変革につながるイノベーションの創出を目指す。⑮

評価指標	<p>1) 科研費について、採択に向けた支援事業等を通じて、採択率（新規＋継続）を、第3期の本学平均値 41.6%（2016～2020年度）に対して、上半期終了時まで5%以上、第4期終了時まで累計10%以上増加させる。</p> <p>2) 若手研究者等を対象として毎年度300万円以上の予算枠を確保し、学内公募により第4期において年平均10件の研究費支援を実施する。また、若手研究者が中心的役割を担うことにより、本学の特色ある研究領域となることが大きく期待される研究プロジェクトを学内公募により選定し、一年度あたり1,000万円を上限として3事業年度程度継続して支援する。</p>
------	--

【23】地球規模の資源・環境・エネルギー問題の解決を目指し、資源学分野における最先端の教育研究として、南部アフリカの持続的なスマート・マイニングによる資源開発、及び中央アジアにおける地中熱・地下水熱利用による脱炭素型熱エネルギー供給システム等の研究を推進する。

評価指標	<p>1) 国際資源学研究科において、2023年度までに査読のある総英文論文数を第3期の平均値 87.75 編（2016～2019年度）を上回り、第4期終了時まで第3期の平均値から10%増加させる。</p>
------	---

【24】地域課題解決や地域産業振興を推進するため、金属リサイクル、自動車・航空機産業、再生可能エネルギー等の研究を推進し、早期の社会実装を目指す。

評価指標	<p>1) 産学官連携による共同・受託研究の件数について、第4期の年度平均値を、第3期の年度平均値 32.4 件（2016～2020年度）を基準として20%以上増加を実現する。</p>
------	--

【25】高齢者の認知症の予防や危険因子の解明、高い健康リスクを改善し健康維持・向上を図るためのヘルスケア、高齢者に多い病気の早期発見や日常生活のサポート、在宅等における予後の管理等、高齢者の高いQOLを実現するための研究を推進する。

評価指標	<p>1) 先進ヘルスケア工学院で推進する研究テーマや学内外の組織・機関等と連携して実施する医理工連携に関する共同研究等を促進し、研究成果の学会発表件数を上半期に20件以上、第4期終了時に累計50件以上にする。</p>
------	---

【26】医学系研究のこれまでの実績を生かし，研究により得られた科学的理論や知見を次世代の革新的な診断・治療法の開発に繋げるトランスレーショナルリサーチ（橋渡し研究）を推進する。

評価指標	医学系研究科において，次の評価指標を設定する。 1) 2023年度までに査読のある総英文論文数を第3期の平均値364編（2016～2019年度）を上回り，第4期終了時までに第3期の平均値から10%増加させる。 2) 2025年度までに学内外の組織・機関等との共同研究の件数を第3期の平均値19件（2016～2020年度）から10%増加させる。
------	---

【27】教育・発達や心理に関わる人間科学とともに，人文科学，社会科学，自然科学の垣根を越えた学際的な地域研究を推進することにより，秋田県を典型とする少子高齢化社会における課題解決や持続的な発展に貢献する。

評価指標	1) 地域づくりに貢献する研究を「秋田創生学」として展開し，その活用を目指して，地域研究に関わる，地域の諸機関・団体との共同研究を上半期は年3件以上，下半期は年6件以上とする。 2) 地域研究に関わる成果を踏まえたフォーラム，講習等を上半期終了時までに年3回以上実施することとし，下半期は年3回以上の実施を維持した上で各年度の参加者を延べ400名以上とする。
------	--

4 その他社会との共創，教育，研究に関する重要事項

【11】学部・研究科等と連携し，実践的な実習・研修の場を提供するとともに，全国あるいは地域における先導的な教育モデルを開発し，その成果を展開することで学校教育の水準の向上を目指す。（附属学校）⑱

4 その他社会との共創，教育，研究に関する重要事項に関する目標を達成するための措置

【28】DX社会を見据えたICT教育，主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善，異校種間連携等についての研究開発に先進的に取り組むとともに，全国の先進校とのネットワークを形成し，その成果を検証・分析し，公開研究協議会のほか，オープン研修会等を通じて広く発信する。

評価指標	1) 国が示した「GIGAスクール構想 本格運用時チェックリスト」における本学の該当項目について，2023年度までに80%を，また2025年度までに全ての項目を達成するとともに，第4期終了時までに小学校から中学校までの連続したICT教育体制を構築する。 2) ①学部と附属学校園との協働による授業・研究，②附属学校園での連携授業・行事，③公開研究会へ参加する自治
------	--

	<p>体・学校関係者の数をいずれも2019年度（①231回，②41回，③1,402名）に比して10%増とし，2024年度までは授業改善及び異校種間連携等についての研究に主として取り組む。さらに，2025年度までには全国の先進校とのネットワークを形成し，その後，第4期終了時まではそれまでの成果を検証・分析し発信する。</p> <p>3) 公開研究協議会やオープン研修会等を合わせて各学校園で毎年度2回は実施する。これらの研究発信が参加者へ効果をもたらしているか，アンケートを行って検証を進める。上半期までにアンケートを分析して効果を検証し，第4期終了時までにそれらの検証結果を踏まえた研究発信を行う。</p>
--	--

- 【29】秋田県の高い教育実践力，探求型授業を基盤に，幼児教育，特別支援教育等の充実，コミュニティスクール化等の社会の要請を踏まえ，附属学校地域協働協議会において年度計画・評価報告を行うとともに，附属学校園と学部・研究科（教職大学院）と共同で研究活動を行い，教育実習を含む教員養成プログラムとも連携し，教員養成機能の充実及び教員の資質向上を図る。

<p>評価指標</p>	<p>1) 附属学校園と地域住民・機関とが協働した活動を行う体制を2023年度までに整え，2024年度より運用する。附属学校園における活動等の成果を，附属学校地域協働協議会で協議する。また学部・研究科等と連携して研究分析し，関連する学協会において発表・投稿することにより幅広く検証する。</p> <p>2) 附属学校園での教育実習について，実習生からの意見・要望を取り入れて改善を進め，教育実習を履修した学生のうち，大学院進学，保育士を除いて，教員に就職することを目指す者の割合を，第4期期間中の平均が65%以上となるように取り組む。</p> <p>3) 教員の資質向上のための研修会及び共同委員会を毎年開催し，第4期期間中の平均で，毎年80%以上の附属学校園教員及び60%以上の学部等教員が参加する。さらに，第4期終了時までに学部等教員が実施する附属学校での出前授業の教科を，第3期で行った教科（体育，理科，数学）から全ての教科等に拡大する。</p>
-------------	--

- 【30】多様な教育的ニーズのある子どもたちに対する相談・支援体制を充実させ，心のバリアフリー教育，交流及び共同学習等を推進し，インクルーシブな学校園の学習環境を整備する。また，大学キャンパスが，障害者理解と地域の障害者雇用の

モデルとなるよう、障害のある児童生徒の授業やインターンシップの場として積極的に活用する。

評価指標	1) 附属学校園で、インクルーシブ教育推進連絡会議（仮称）を2022年度に新設し、2023年度までに相談・支援体制、心のバリアフリー教育、交流及び共同学習等の事業の成果を測定するためのチェックリストを開発するなど、実施体制を整備する。2024年度以降は、上記の事業を実施するとともに、開発したチェックリストを活用して、事業の有効性を附属学校運営会議及び附属学校地域協働協議会で検証し、県内外にその成果を発信する。 2) 附属特別支援学校を中心に大学キャンパス内を活用した授業や実習の件数を第3期の平均値12件（2016～2020年度）から1.5倍にする。
------	--

【12】世界の研究動向も踏まえ、最新の知見を生かし、質の高い医療を安全かつ安定的に提供することにより持続可能な地域医療体制の構築に寄与するとともに、医療分野を先導し、中核となって活躍できる医療人を養成する。（附属病院）㊹

【31】秋田県が抱える医療過疎問題や豪雪による医療施設への通院困難等の問題を解決する方策として医療のDX化を推進するため、2021年度現在対面診療で行っている高度医療の提供を、IT技術を用いた遠隔診療でも同等に実施できるか検証する。また遠隔診療を安全に実施できる医療人を養成する。

評価指標	1) 遠隔診療に関する実証実験を、上半期中に2件、下半期中に新たに2件を行い、第4期終了時まで計4件以上実施する。遠隔診療における個人情報の取り扱いや医療情報に関する研修会を年1回以上開催し、附属病院教職員の出席率を100%にする。
------	--

【32】魅力ある専門医養成プログラムを作成して専攻医を確保し、秋田県の医師充足率や専門医不足を改善する。特に新設した総合診療医センターと高度救命救急センターを中心に、専門医不足の地域医療現場で要望の高い総合診療能力を持った専門医を育成する。また感染症や高度医療に関する教育プログラムを充実させて、各分野の専門医、認定・専門資格を持った薬剤師・看護師等の高度医療人を養成し、専門医不足が深刻な秋田県の医療体制構築に寄与する。

評価指標	1) 毎年30名以上の専攻医を確保する。
------	----------------------

【33】ヒトを対象とする質と信頼性の高い臨床研究として医師主導の臨床研究や附属病院を主施設とした特定臨床研究を実施し、開発した高度な医療技術を世界に発信する。

	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="1151 140 1413 204">評価指標</td> <td data-bbox="1413 140 2141 204">1) 医師主導治験を第4期中に5件以上、特定臨床研究を年間5件以上、治験実施率を年62.5%以上実施する。</td> </tr> </table>	評価指標	1) 医師主導治験を第4期中に5件以上、特定臨床研究を年間5件以上、治験実施率を年62.5%以上実施する。		
評価指標	1) 医師主導治験を第4期中に5件以上、特定臨床研究を年間5件以上、治験実施率を年62.5%以上実施する。				
<p>II 業務運営の改善及び効率化に関する事項</p> <p>【13】 内部統制機能を実質化させるための措置や外部の知見を法人経営に生かすための仕組みの構築、学内外の専門的知見を有する者の法人経営への参画の推進等により、学長のリーダーシップのもとで、強靱なガバナンス体制を構築する。①</p> <p>【14】 大学の機能を最大限発揮するための基盤となる施設及び設備について、保有資産を最大限活用するとともに、全学的なマネジメントによる戦略的な整備・共用を進め、地域・社会・世界に一層貢献していくための機能強化を図る。②</p>	<p>II 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置</p> <p>【34】 内部統制機能の実質化を図るために、体制の見直しを行い、役員会において内部統制状況のモニタリングを行う。また、経営協議会の外部委員は、多様な専門性を持つ人員構成にするとともに、本学が取り組むべき課題についての意見交換を活性化させることに加えて、専門的な視点を有する外部有識者によるアドバイザーミーティングを発足させ、より専門的な外部の意見を大学経営に生かす仕組みを構築する。さらに、毎週開催している役員ミーティングでこれらの遂行状況をモニタリングし、学長を中心とする強靱なガバナンス体制を維持する。</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="1151 635 1413 1118">評価指標</td> <td data-bbox="1413 635 2141 1118"> 1) 内部統制は、財務面や法令順守等に関して機能しているが、より実効的なものとなるよう、2022年度中に、業務の有効性や効率性をマネジメントする仕組みを構築し、年1回以上役員会で内部統制の状況をモニタリングし、点検・改善を行う。 2) 外部委員の意見を大学運営に効果的に反映させるため、以下の内容を実施する。 (1) 定例の経営協議会開催時(年4回程度)に、大学経営に関わる重要事項に関してテーマを設定して学内外の委員でディスカッションを行い、出された意見の遂行状況を半期毎にモニタリングし、その結果を同会議にも報告し、さらなる改善に向けた意見を聴取する。 (2) アドバイザーミーティングはメンバーを固定せず弾力的に構成して、年4回程度開催し、社会情勢や専門性の高い意見を聴取して大学経営に生かす。 </td> </tr> </table> <p>【35】 保有資産を最大限に活用するため、土地、建物の使用状況を定期的に点検し、有効活用を推進する。また、全学的なマネジメントによる戦略的な整備・共用を進めるため、設備マスタープラン・キャンパスマスタープランに基づく整備を推進するとともに、共用を促進する。</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="1151 1358 1413 1452">評価指標</td> <td data-bbox="1413 1358 2141 1452">1) 土地、建物の使用状況の確認を毎年度1回以上行うとともに、新築・増築の場合の教育研究施設の共用スペースは10%以上、大規模改修の場合は5%以上を整備面積全体</td> </tr> </table>	評価指標	1) 内部統制は、財務面や法令順守等に関して機能しているが、より実効的なものとなるよう、2022年度中に、業務の有効性や効率性をマネジメントする仕組みを構築し、年1回以上役員会で内部統制の状況をモニタリングし、点検・改善を行う。 2) 外部委員の意見を大学運営に効果的に反映させるため、以下の内容を実施する。 (1) 定例の経営協議会開催時(年4回程度)に、大学経営に関わる重要事項に関してテーマを設定して学内外の委員でディスカッションを行い、出された意見の遂行状況を半期毎にモニタリングし、その結果を同会議にも報告し、さらなる改善に向けた意見を聴取する。 (2) アドバイザーミーティングはメンバーを固定せず弾力的に構成して、年4回程度開催し、社会情勢や専門性の高い意見を聴取して大学経営に生かす。	評価指標	1) 土地、建物の使用状況の確認を毎年度1回以上行うとともに、新築・増築の場合の教育研究施設の共用スペースは10%以上、大規模改修の場合は5%以上を整備面積全体
評価指標	1) 内部統制は、財務面や法令順守等に関して機能しているが、より実効的なものとなるよう、2022年度中に、業務の有効性や効率性をマネジメントする仕組みを構築し、年1回以上役員会で内部統制の状況をモニタリングし、点検・改善を行う。 2) 外部委員の意見を大学運営に効果的に反映させるため、以下の内容を実施する。 (1) 定例の経営協議会開催時(年4回程度)に、大学経営に関わる重要事項に関してテーマを設定して学内外の委員でディスカッションを行い、出された意見の遂行状況を半期毎にモニタリングし、その結果を同会議にも報告し、さらなる改善に向けた意見を聴取する。 (2) アドバイザーミーティングはメンバーを固定せず弾力的に構成して、年4回程度開催し、社会情勢や専門性の高い意見を聴取して大学経営に生かす。				
評価指標	1) 土地、建物の使用状況の確認を毎年度1回以上行うとともに、新築・増築の場合の教育研究施設の共用スペースは10%以上、大規模改修の場合は5%以上を整備面積全体				

に対して確保する。
2) 設備マスタープランを毎年度更新し、同プランに基づき新たに整備した研究設備 100%の共用体制を目指す。

III 財務内容の改善に関する事項

【15】 公的資金のほか、寄附金や産業界からの資金等の受入れを進めるとともに、適切なリスク管理のもとでの効率的な資産運用や、保有資産の積極的な活用、研究成果の活用促進のための出資等を通じて、財源の多元化を進め、安定的な財務基盤の確立を目指す。併せて、目指す機能強化の方向性を見据え、その機能を最大限発揮するため、学内の資源配分の最適化を進める。
③

III 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

【36】 研究シーズ等の情報発信を行い、共同研究費等を増加させる。また、同窓会等へ協力を働きかけ、個人や法人から継続的に寄附を募り、学生支援や研究支援等に資するため、「秋田大学みらい創造基金」への寄附金を拡充する。さらに、社会情勢や金融機関の経営状況を調査し、資金を計画的に運用するとともに、教育研究活動に支障のない範囲で土地等を第三者に貸し付ける等の有効活用を図り、財源の多様化を進める。併せて、第4期における本学の機能強化を促進するため、毎年度戦略的な経費を確保し、学内資源配分の最適化を進める。

評価指標	<p>1) 2023年度までに延べ100件以上の研究シーズ等の情報発信を行い、2025年度までに地域課題解決に関する共同研究のマッチングを行い、第4期終了時点での共同研究費を2020年度と比較し10%以上(1,000万円以上)増加させる。(中期計画【1】評価指標4再掲)</p> <p>2) 第4期中の寄附金の受入れ額を1億5,000万円以上とする。</p> <p>3) 上半期中に社会情勢や土地周辺の状況を踏まえた調査結果等を基に活用方法を決定し、第4期終了時まで1件以上の貸付を開始する。</p> <p>4) 評価・IRセンターが実施するデータ解析結果等に基づき、運営費交付金等の学内資源の配分を最適化するシステムを構築する。</p>
------	---

IV 教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する事項

【16】 外部の意見を取り入れつつ、客観的なデータに基づいて、自己点検・評価の結果を可視化するとともに、それをういたエビデンスベースの法人経営を実現する。併せて、経営方針や計画、その進捗状況、自己点検・評価の結果等に留まらず、教育研究の成果と社会発展への貢献等を含めて、ステークホルダーに積極的に情報発信を行うとともに、双方向の対話を通じて法人経営に対する理解・支持を獲得する。④

IV 教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置

【37】 教育研究や業務運営、財務等に関する自己点検・評価を実施してデータの可視化を行い、また学長から諮問があった事項を大学戦略室で検討し、データを活用した経営戦略の立案や業務改善、組織体制の見直し等に繋がるIR (Institutional Research, 教育研究活動の可視化) を実施する。

評価指標	<p>1) 2022年度に第4期中期計画の達成に向けたロードマップを整備し、半年毎に進捗・達成状況確認票により自己点検・評価の結果を評価・IRセンターが取りまとめ、大学</p>
------	--

運営会議等において状況を確認し必要に応じた措置を行う体制を構築し運用する。また、下半期には、法人評価（4年目終了時、第4期終了時）や機関別認証評価の受審に向けた自己点検・評価を実施する。

2) 大学戦略室から依頼のあった事項に対し、評価・IRセンターが各部局等における教育研究や運営等に関するデータ解析を行い、効率的な法人運営を行うためのシステムを構築する。

【38】 大学運営の透明性の確保やその役割を明確化するため、教育研究や経営状態等の各種情報を積極的に発信するとともに、本学の教育研究内容を広く周知させるための広報戦略やアクションプランを継続的に実施し、大学が発行する広報誌やホームページ、マスメディアのほか、SNS（Social Networking Service, 上の社会的ネットワーク）等を積極的に活用し、ブランド力の向上を目指す。

評価指標	1) 自己点検・評価の実施状況や各種評価の結果、財務情報等を大学ホームページ等で適時公開し、開示状況及び件数について2021年度比で100%を維持する。 2) YouTube, Twitter, Facebook, Instagram, その他のSNSを活用した情報発信を積極的に行い、年間の投稿件数を2021年度比で50%以上増加させる。
------	---

V その他業務運営に関する重要事項

【17】 AI・RPA（Robotic Process Automation）をはじめとしたデジタル技術の活用や、マイナンバーカードの活用等により、業務全般の継続性の確保と併せて、機能を高度化するとともに、事務システムの効率化や情報セキュリティ確保の観点を含め、必要な業務運営体制を整備し、デジタル・キャンパスを推進する。⑳

V その他業務運営に関する重要事項に関する目標を達成するためにとるべき措置

【39】 情報化推進計画を刷新し、計画的に業務の自動化やデジタル化を進め、時代に対応したデジタル・キャンパスを構築する。

評価指標	1) 上半期では、2022年度に「第4期情報化推進基本計画」を策定し、2023～2024年度に情報基盤の整備を行い、2021年度入学者から導入したPC必携化に伴うペーパーレス及びデジタル社会に対応した教育環境を整備する。なお、下半期の2025年度からは、構築した教育環境の点検・改善を行う。
------	---

【40】 情報セキュリティポリシーや各種マニュアル・手順書のほか、情報ネットワーク機器のセキュリティ対策、緊急時における体制や手順について、随時、点検・見直しを行う。また、教職員及び学生の情報セキュリティ意識の向上を図るための企画を開催し、理解度や受講率を向上させるための動画配信等の取り組みを実施

する。

評価指標	1) 情報セキュリティ対策に係るポリシーやマニュアル等の点検と見直しを年1回行い、常に現状に適合した内容にするとともに、情報セキュリティ監査を毎年実施する。また、教職員及び学生の情報セキュリティ意識を一層高めるため、毎年、利用者向け教育・意識啓発活動として情報セキュリティセミナー及び情報セキュリティ自己点検を実施する。
------	--

- 【41】新たに導入されたグループウェアの活用を促進し、テレワークの環境を充実させ、感染症をはじめとする事象発生時も業務遂行に支障のない強靱な運営体制を構築する。

評価指標	1) 職員からの各種申請を、出勤/在宅勤務を問わずグループウェア上から可能とする。具体的には、2022年度にグループウェア上の職員申請ガイドに様式が掲載されている234項目のうち、所属長等による確認が必須な申請事務及びサービス関係事務を除き、50項目程度の事務をシステム上で直接申請できるようにする。2023年度以降は、これらの申請と同様の手順で処理が可能なサービス関係事務にも拡大し、テレワーク環境においても職員が個人申請する事務はシステム上で申請できる環境に整備する。最終年度までに職員申請ガイド掲載件数の7割程度をシステム申請の対象にする。
------	---

	VI 予算（人件費の見積もりを含む。）、収支計画及び資金計画 （後日提出）
	VII 短期借入金の限度額 （後日提出）
	VIII 重要な財産を譲渡し、又は担保に供する計画 （後日提出）
	IX 剰余金の使途 （後日提出）
	X その他 1. 施設・設備に関する計画 （後日提出）
	2. 人事に関する計画 （1）教育研究力の向上に資する人事給与制度の実現 ・教員人事については学長が全学的な視点に立った教員配置を実践する。特に、教授の選考（採用、昇任）にあたっては、各部局の教育研究カウンスル等の議を経た教員候補者について、人事調整委員会構成員による面談を実施するなど、透明性の高い大学運営を推進する。また、全学統一基準による教員活動評価の結果を適切に処遇（給与・賞与・昇任・研究費・顕彰等）に反映させるとともに、特に、新年俸制適用教員にあたっては、雇用財源に外部資金等も活用し標準を上回る高額給与の支給を可能にすることで、教員のモチベーションの向上を図り、持続的に新たな価値の創出を促進する。 （2）人材の多様性の確保 ・研究者の多様性を高めることで持続的に新たな価値を創出し、発展し続けるための基盤を構築するため、学術分野の特性に配慮しつつ、学外から積極的に優秀な若手を登用し、第3期中期計画に掲げた若手教員比率をさらに向上させる。加えて、教授の採用においても、特に新しい学問分野を専門とする教授の採用におい

では、積極的に若手を採用することとし、若手教員の積極的な採用に努める。また、女性研究者に対しては、研究費用の助成をはじめとした女性研究者支援制度を充実させることにより、女性が働きやすい職場環境を醸成し、女性教員比率の向上に努めるほか、14%以上となった女性管理職の比率をさらに向上させる。また、優れた人材が大学や企業などの壁を越えて活躍できる環境を整備するため、クロスポイントメント制度を活用するなどし、多様で優れた人材の確保に努める。

(3) 事務系職員・技術系職員の人材育成の推進

- ・多様な人材の確保により組織活性化を図るため、民間企業や官庁等の勤務経験者等、幅広い分野から優秀な人材を積極的に採用するとともに、研修及び学外機関との人事交流の促進により、人材育成を推進する。

3. 中期目標期間を超える債務負担

(後日提出)

4. 積立金の使途

(後日提出)

5. その他国立大学法人等の業務の運営に関し必要な事項

(1) コンプライアンスに関する計画

- ・「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」や「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」を踏まえ、不正を事前に防止する体制を不断に見直すとともに、教職員の意識啓発を継続して実施する。特に、公的研究費を受給する研究者及び大学院生に研究倫理教育計画に基づく研究倫理教育プログラムを100%受講させるなど、研究における不正行為・研究費の不正使用が起こらない環境づくりを推進・強化する。

(2) 安全管理に関する計画

- ・全学的なリスク管理を徹底し、内部統制機能を強化するとともに、引き続き、学生、教職員の安全を第一に考えた防災対策としてキャンパスごとに防災訓練を年1回以上実施し、リスク管理・安全教育についての意識を向上させる。

(3) マイナンバーカードの普及促進に関する計画

- ・教職員に対して、マイナンバーカードの意義・利便性及び取得方法について、採用時や学内のイベント開催時などの際に周知を図り、積極的な取得を促す。ま

法人番号：12

た、学生に対して、全学必修科目「初年次ゼミ」における学生生活に係るリテラシー教育の中でマイナンバーカード取得のメリットを周知し、マイナンバーカードの積極的な取得と健康保険証の利用申込を働きかける。